

# W・アンダーソン (Anderson) の 持ち帰った『病草紙』

酒 井 シ ヅ

海軍軍医学校の教師として、明治六年(一八七三)十月から同十三年(一八八〇)一月まで在日した William Anderson (一八四二—一九〇〇) の事蹟およびその履歴は長門谷洋治らにより明らかにされている。<sup>(一)</sup> すぐれた画家でもあったアンダーソンが日本および東洋の美術に造詣が深く、在日中にそれらを蒐集し、その多くが大英博物館の所蔵となっていることも知られている。<sup>(二、三)</sup> その中に病草紙一巻があった。

それは十七図の絵と人見麩の撰文等からなる。その絵からこれが、いわゆる『異疾病草紙』と呼ばれるものであることは明らかである。

巻末の文は、

「右異疾之図は土佐刑部大輔光長正筆也

安永九年庚子五月 今村隋学写

天明八年戊申夏 久間晋再摹写」

で始まる。人見の撰文には安永己亥(八年)八月三日と日付が入る。それを

「嘉永七年甲寅季夏従多紀楽春院借写」

のが、アンダーソンの持ち帰った絵巻(大英本)である。

同系統の病草紙が国内に少なくとも九本あることは佐野みどりにより指摘されているところである。<sup>(四)</sup> しかし、それらには詞書はない。人見の撰文はそれを補うものであり、『異本病草紙』の性格を知る上に助けとなる。また、多紀楽真院の所有であったことを示す記事は、これまで、『新撰病草紙』を除く他のもので、医師とのかかわりをはじめて示したものであり、注目に値する。報告では、人見の撰文を中心に図の内容について述べる。

## 文 献

- (一) 長門谷洋治「本邦海軍軍医教育の基礎を築いた二人の英人医師」『臨床科学』二十二巻二号、二三九—二四五
- (二) Application and Testimonials for the Chair of Anatomy at the Royal Academy of Arts: William Anderson,

F.R.C.S.

(iii) Anderson: Descriptive and Historical Catalogue of a Collection of Japan, 1886.

(iv) 佐野みどり「病草紙考」『図説日本医事文化史料集成』三省堂、第一巻、一九七八年、二八五～二九二

(順天堂大学医学部医史学研究室)

## 豊後府内病院の所在位置と規模について

東野利夫

本邦で初めて洋式の病院が開設され診療が行われたのは弘治、永禄、元亀、天正の頃、一五五七年から一五八〇年ごろの約二十五年ばかりで、その大凡の事情は当時のイエズス会士の通信書簡により窺い知ること出来るが日本側の史料は皆無である。

その府内病院の位置については昭和十九年(一九四四)海老沢有道氏が別府市の日名子太郎氏蔵の豊後府内古地図、天保五年(一八三四)九月二十四日(写)の中に記載されている「デウス堂」という個所に注目され府内病院もその隣接地にあったのではないかと推定されていた。

筆者は昭和六十年(一九八五)大分市在住の高山家に伝わる二つの大支時代古地図(写)を考証する機会に恵まれた。